

フェドシューク
『古典作家の難解なところ
あるいは
19世紀ロシアの生活百科』(その10)

Ф. А. Федосюк

«Что непонятно у классиков

или

Энциклопедия русского быта XIX века»

鈴木 淳 一

これは「文化と言語」56号(2002年3月)、57号(2002年10月)、62号(2005年3月)、63号(2005年10月)、64号(2006年3月)、65号(2006年10月)、66号(2007年3月)、67号(2007年11月)、68号(2008年3月)に発表したフェドシューク著『古典作家の難解なところ、あるいは19世紀ロシアの生活百科』翻訳の続きである。9章、1章、2章、3章、4章、5章、6章、7章、8章に続いて、今回は10章を訳出することとした。10章は分量も少なく、大学院生の都合もあって、鈴木が一人で担当することとした。

注については前回同様である。訳注は [] という形でできる限り本文中に組み入れるようにしたが、より詳細な説明が必要と判断した場合は脚注をつけた。訳語だけで分かり難い場合はロシア語を並列するようにしたのも前回同様である。

第10章
貴族と農民以外の階級
ДРУГИХ СОСЛОВИЙ ЛЮДИ

1 節
小市民階級と商人階級
Мещанство и купечество

1775年にエカテリーナII世の政令が發布されて以来、ロシアでは社会の〈諸階級 сословия〉への分化が激しさを増していった。国民は、諸々の「税 подать (=налог)」を納めなければならない〈納税階級 податное сословие〉と、納税義務を持たない〈免税階級 неподатное сословие〉に分けられていた。

「免税階級」である特権階級には「貴族階級 дворянство」と「聖職者階級 духовенство」が、「納税階級」には「農民階級 крестьянство」、「小市民階級 мещанство」、「商人階級 купечество」が属していた。「納税階級」の人々には納税義務の他に「新兵供出義務 рекрутская повинность」も課されていたばかりか、移動の自由が制限されてもいた。

商人も小市民も、そして聖職者も、農奴を所有する権利を持たず、農奴所有は、若干の例外を除いて、唯一貴族だけの特権であった。

〈小市民階級 мещанство〉とはどのようなものであろうか？ ここ100年の間、この概念には非常に否定的な意味づけがなされてきた。その社会的な所属とは無関係に、ごく限られた利己的な関心と狭隘な知的識見しか持たない人物はすべて小市民と呼ばれたのである。こうした意味での「小市民階級」という言葉をその社会評論で広範に使いこなしてみせたのは、マクシム・ゴロキエであった（『小市民階級覚書 Заметки о мещанстве』を初めとする諸論文）。

しかしながら「小市民階級」という言葉の原義には、非難めいた意味など微塵も含まれてはいない。「小市民 мещанин」の文字通りの意味は「都市住民 горожанин」であり、これは古語の「都市 место」、つまり現代語の「都市

город」から派生した言葉なのである。現代でも依然として、都市の境界線外の居住区を指して「郊外 предместье」という言葉が使用されている。だが「小市民」と呼ばれたのは「小市民階級」に属する人々、すなわち「手工業者 ремесленник」、「小商人 мелкий торговец」、あるいは「家屋所有者 домовладелец」などであった。そしてそのほとんどが、解放農奴か身請け農奴か、はたまた年季を勤め上げた兵士かの区別はともかくも、いずれもかつては農民だった人々であり、たとえどんなに零落しようと、貴族が小市民となることはなかった。「小市民」として登録されていたのは、500ループリ以下の資本しか持ち合わせない「都市住民」であった。この階級身分は世襲された。

チュルヌイシェフスキーの長篇『何をなすべきか Что делать?』の主人公の一人、ロプウーホフの父親は、「リャザンの小市民で、小市民階級としては恵まれた暮らしをしていた。つまり彼の家族は毎週の日曜日だけに限らず肉入りスープを食べ、毎日お茶を飲むことすらできたのである。彼はどうにか息子をギムナジウムに通わせることもできた рязанский мещанин, жил, по мещанскому званию, достаточно, то есть его семейство имело щи с мясом не по одним воскресеньям и даже пило чай каждый день. Содержать сына в гимназии он кое-как мог」[2章2節]。

妻は、どんな階級の出身であろうと、結婚と同時に夫の階級の所属者となった。サルトィコフ＝シチェドリーンの『僻地の旧習 Пошехонская старина』にはこうある——「農奴のイコン画家の妻は、小市民階級の出であったが、画家と結婚して農奴になろうと決心したのであった жена крепостного иконописца происхождением из мещан решила закрепоститься, выйдя за него замуж」[5章]。

同じようなケースはレスコフの短篇の一つにも描かれている。そこではフランス人女性がロシア人農奴に恋するのだが、彼女は「ロシア帝国の法律に暗かったので、隷属状態にあるロシア人と結婚すれば彼女自身も自由を奪われ、彼女の子供までもが農奴となってしまうことが分かっていた в законах империи Российской была не сведуща и не постигала, что через такой брак

с человеком русским невольного положения она сама лишилась свободы и дети ее делались крепостными」[作品名不詳]。

小市民である手工業者の魅力的な人物像は、オストロフスキーの戯曲『雷雨 Гроза』に登場するクッリーギンに見出すことができる。彼は町へやってきたボリス・グリゴリエヴィチにこう語っている——「旦那さま、あなたさまが小市民階級の中に見出されるのはただただ無作法、そしてこれ以上はない貧しさばかりでございます。手前どもには、旦那さま、この殻を破ることなど金輪際できないのです！ 手前ども、まっとうな働きでは日々の糧以上のものを手にすることなどできないからです В мещанстве, сударь, вы ничего, кроме грубости да бедности нагольной, не увидите. И никогда нам, сударь, не выбраться из этой коры! Потому что честным трудом никогда не заработать нам больше насущного хлеба」[1幕3場]。才能豊かな独学の機械工クッリーギンの夢は人々に奉仕することなのだが、彼にはそうすべき権利も可能性もない——「小市民階級に仕事を与えなければなりません。さもなければ、たとえ腕はあっても、振るいようがありませんから Работу надо дать мещанству. А то руки есть, а работать нечего」[同前]。

チェーホフの短篇『廣野 Степь』ではホーロドフ老人がこう言っている——「わしの兄弟たちは小市民階級に登録し直して、町で職人になっているが、わしは百姓だ Братцы мои в мещане отписались и в городе мастерством занимаются, а я мужик」[4章]。小市民階級という定義にはさらに、1863年までは「体罰 телесные наказания」が課されていたという事実も付け加えておかなければなるまい。

ゴンチャロフの『オプローモフ Обломов』にはまたこう書かれている——「市長が小市民の齒を殴る городничий бьет мещан по зубам」[1部2章]。

我々は通常〈農民 крестьяне〉という言葉で村の住民と結びつけて考えており、耕作に従事する農民については第9章「貴族と農民」でも言及しておいた。しかし階級としての「農民」という概念はもっとずっと広いものであった。かつては都市に常時、資産不足かあるいは何か別な原因のためにどうして

も小市民として登録できない農民が相当数住んでいた。そうした状況は農奴解放後ですら変わらなかった。ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟 Братья Карамазовы』では、ゾシマ長老が町から彼のもとへやってきた信者たちに、「小市民階級の人々でございましょうな? По мещанству, надоть быть?」と尋ねると、信者たちはこう答えている——「私どもは、長老さま、町の者です。身分は農民階級ですが、町の者で、都会暮らしをしております Городские мы, отец, городские, по крестьянству мы, а городские, в городе проживаем」[1部2編3章]。実はこれらの信者たちは運送業に従事しており、「馬も馬車も и лошадок, и экипажи」持っているのである [同前]。この長篇ではまた、「スコトプリゴーニエフスクの小市民たちはほとんど農民同然で、田畑を耕してさえいる скотопригоньевские мещане почти те же крестьяне, даже пашут」ことも知ることができる [4部12編1章/「スコトプリゴーニエフスク Скотопригоньевск」は「家畜追込」といった意味の架空の都市名]。

社会の中で独特な位置を占めていたのは〈商人階級 купечество〉、つまり商工業階級である。「商人階級」として登録されたのは、500ルーブリ以上の資本を有する都市住民たちである。1775年以来商人は数種の範疇に、すなわちいくつかの〈ギルド гильдия〉に区分されるようになった。最下級の「第三ギルド третья гильдия」の商人たちは500～1000ルーブリの資本を、「第二ギルド вторая гильдия」の商人たちは1000～10000ルーブリの資本を、そして「第一ギルド первая гильдия」の商人たちは10000ルーブリ以上の資本を有していなければならなかった。「第一ギルド」と「第二ギルド」の商人たちは、「新兵供出義務」と「体罰」を免除された。1863年になると「第三ギルド」は廃止され、「第一ギルド」と「第二ギルド」だけが残ることになった。

ゴゴリの喜劇『結婚 Женитьба』に登場する花嫁のアガーフィヤ・チーホヴナは、「佐官の娘ではなく、第三ギルド商人の娘 не штаб-офицерша, а купца третьей гильдии дочь」[1幕8場]¹、つまり貧乏商人の娘である。もっ

¹ この引用はやや不正確で、花婿ポトコリョーシンと女仲人フョークラの会話を繋ぎ合せた

とも二枚舌使いの女仲人は、彼女の父親の身分をあの手この手で飾り立てようとしている。この喜劇の葛藤は、ポトコリョーシンが持参金たっぷりな娘と結婚したいのに対し、「商人階級 купеческое звание」の娘の方はできるだけ官位の高い貴族官吏に嫁ぎたがっているという点にあり、そこに女仲人の腕の見せ所もまた生じるというわけである。似たようなシチュエーションは、パーヴェル・アンドレーエヴィチ・フェドートフの有名な絵画『少佐の結婚申し込み Сваатовство майора』に描かれている²。

トルストイの長篇『復活 Воскресение』に描かれている第二ギルド商人スメリコーフ殺人の裁判では³、陪審員の一人に同じ第二ギルド商人のバクラショフが入っている [1編7章]。殺された商人と裁く側の商人——トルストイは二人の商人の人物像を実に生き生きと、その心理もなるほどと思わせる筆致で描いている。

チェーホフの短篇『谷間 В овраге』では大工が、商人と口論した様子を次のように語っている——「俺は言ったんだ、あんたが第一ギルドの商人なのに対して、俺は大工で、それはその通りだが、ヨシフ聖人もまた大工でしたよってね Вы, говорю, купец первой гильдии, а я плотник, это правильно. И Святой Иосиф, говорю, был плотник」 [5章]。さらに彼はこう続けている——「それからその後で、つまりそんな話をした後で、俺はこうも考えたんだ。いったいどっちが偉いんだ、第一ギルド商人か、それとも大工か？ 当然大工に決まってるさ、なあみんな！ А потом этого, значит, разговору, я и думаю: кто же старше? Купец первой гильдии или плотник? Стало быть,

ものとなっている。正確には以下の通りである——「(ポトコリョーシン)『とはいっても彼女はまさか佐官の娘じゃないだろ？』(フョークラ)『第三ギルド商人の娘です』*Подколёсин*. Да ведь она, однако ж, не штаб-офицерка? / *Фёкла*. Купца третьей гильдии дочь.」。ところで、原文の「офицерка」は辞書には見当たらず、フェドシュークは「офицерша」としている。フェドシュークの解釈が正しいとして、通常「офицерша」は「将校の妻」の意であるが、ここではコンテクストから考えて「将校の娘」と解しておいた。

² 論文末の〈付録1〉を参照のこと。

³ フェドシュークは「Смерикоев Смельков」としているが、「Смерикоев Смельков」の間違いであろう。

плотник, деточки!」[同前]。

資本家を代表する人物像は、ゴーゴリの『検察官 Ревизор』に出てくる商人たちに——市長のもとへ請願にやっけてきながら罵倒と呪詛の言葉を浴びせられる羽目になる商人たちに——見出すことができる [5幕2場]⁴。オストロフスキーの喜劇『熱き心 Горячее сердце』には専横な商人、フルィノフが登場するが、彼はもはや地方都市の真の支配者なのであり、市長のグラドボーエフも自ら進んで彼におもねる始末である [3幕9場]。そしてさらにまたゴーリキーの『フォマー・ゴルデーエフ Фома Гордеев』や『アルタモノフ家の事業 Дело Артамоновых』では、裕福な商人たちが自信と威厳に満ちた「町の有力者 отцы города」として登場する。ロシア古典文学は商人階級の急速な変貌ぶりを——社会における商人階級の権利や重要性の目覚ましい進化の様子を——まざまざと伝えてくれる。

しかし、商店やしがらない行商人たちの「丁稚 мальчик」から絶大な権力を持つ百万長者や貴族領地の買収を目論む「洗練された полированный」商人のロパーヒン(チェーホフ『桜の園 Вишнёвый сад』)に至るまでの道程は、非常な苦難に満ちたものであった。金持になるための方法については、オストロフスキーの戯曲の数々にしっかりと描き込まれている。

民衆は新たに現れた搾取者たちに対し、ありとあらゆる綽名を奉った。そうした綽名には「スウコンノエ・ルィロ суконное рыло (羅紗の豚面)」、「サヴラス саврас (駄馬)」、「クロヴォソス кровосос (吸血蝙蝠)」、「ミロエート мироед (ごく潰し)」、「アルシーニク аршинник (反物屋)」等々、実に多様なバリエーションがあった。

ときにはまた、商人を補佐する〈手代 приказчик〉や商店の主人の委託をうけて商売する〈売子 сиделец〉が急激な出世を遂げることもあったし、商店で辛くて汚い雑用に従事する〈丁稚 мальчик〉が彼らに取って代わることもないではなかった。

⁴ 4幕10場では同じ商人たちがフレスタコーフに市長の横暴を訴えている。

買付けを生業とする商人たちは、巨万の富を築き上げた。〈肉魚の買付け商人 прасол〉、〈家畜商人 гуртовщик〉、〈仲買人 маяк〉といった連中は、肉や魚、家畜をほとんどただ同然で仕入れ、それらを膨大な利益を付加した商品として販売したからである。

ゴーゴリはその手帳にこう書き付けている — 「肉魚の買付け商人とは、自分で勝手に商売方法を決めて、何でも売り買いする男のことである Прасол — мужик, торгующий всяко, сам определяя себе род торговли。」

ネクラースフの詩作品では「肉魚の買付け商人」のことがこう歌われている

〔俺が思うに、

「お前さんたちのほうこそ馬鹿ではないか！」

と突然乱暴な言葉を挟んだのは、]

商人の弟のエリヨーミンだった。

彼は農民たちから草鞋であれ、

子牛であれ、コケモモであれ、

手当たり次第に何でも買付けていたが、

特筆すべきは、徴税が行なわれ、

間拔けな農民の資産が

競売にかけられるチャンスを

必ず我が物にしたことである。

〔— И всё-то вы,

Я вижу, дураки! —

Вдруг вставил слово грубое]

Ерёмин, брат купеческий,

Скупавший у крестьян

Что ни попало, лапти ли,

Телёнка ли, бруснику ли,

フェドシューク『古典作家の難解なところあるいは19世紀ロシアの生活百科』(その10) (鈴木淳一)

А главное, мастак
Подстерегать okazji,
Когда Сбирались подати
И собственность вахлацкая
Пускалась с молотка.

[『誰にロシアは住みよいか Кому на Руси жить хорошо』、4編「大宴会」、1章
「苦難の時代 — 苦難の歌」、「模範的農奴 — 忠実なヤコフ」]

民衆がとりわけ敵意を抱いていたのは、政府から徴税権、天然資源利用権、需要の多い商品の売買権を与えられていた〈徴税代理人 откупщик〉であった。酒税の〈徴税代理権 откуп〉は他に類を見ないほど大規模なものであった。ごく平凡な商人たち、あるいはときに貴族までもが、政府には僅かな歩合を支払うだけで、残りの収入をすべて自分の懐へ仕舞い込み、数年後には百万長者に化けてしまうのであった。ネクラソフは「酒税徴集代理権 винный откуп」を行使する「貴族会会長 предводитель дворянства」についてこう書いている —

彼はやがてそのうち徴税代理の顔役となった —

すなわち民衆の飲酒の搾取者となった。

Стал он со временем туз откупной —

Эксплуататор народного пьянства.

[『同時代人 Современники』、2部「現代の英雄たち Герои времени」、「エピソード」]

クルイローフの寓話『徴税代理人と靴屋 Откупщик и сапожник』ではこう歌われている [冒頭4行] —

裕福な徴税代理人は豪華絢爛たる大邸宅に暮らし、
食に酒に贅をこらしていた。

毎日毎日飲めや歌えの大騒ぎを続けながらも、
その財宝は尽きる所を知らなかった。

Богатый Откупщик в хоромах пышных жил.
Ел сладко, вкусно пил;
По всякий день давал пиры, банкеты,
Сокровищ у него нет сметы.

トゥルゲーネフの『春の水 Вешние воды』に出てくる裕福な地主貴族夫人ポーロゾフは、自らの「卑しい出自 низкое происхождение」を鼻にかけているが [38章]⁵、彼女は徴税代理人となった一介の百姓の娘なのである [31章]。

計算高いチチコフは、県庁所在地の町の有力者たちに挨拶回りをするにあたって、当地の徴税代理人を訪問することも必要不可欠と考えている。

未完に終わった『死せる魂』第2部でゴーゴリは、高德な徴税代理人ムウラーゾフという理想化された人間像を登場させている⁶。ムウラーゾフが徴税代理権をどのように行使しているかについては語られていないが、それでもチチコフは、当然のなりゆきとして、彼の百万の富が「もっとも非の打ち所のない方法、もっとも正当な手段によって蓄えられた нажито самым безукоризненным путём и самыми справедливыми средствами」ことに疑念を抱いている [3章/コスタンジョーグロの説明に対してチチコフは、「信じられません не поверю」と応答している]。ムウラーゾフの人物像が欺瞞的で取ってつけたような出来栄とならざるを得なかったのは、こうした実生活上ありえないような矛盾のために他ならない。

1863年に徴税代理権は廃止され、それに取って代わって〈消費税 акциз〉

⁵ ポーロゾフが氏索性を自慢するのは38章だが、そこに「卑しい出自 низкое происхождение」という表現は使われていない。34章に「卑しい出自 плебейское происхождение」という表現があるが、引用と同じ表現は見当たらない。

⁶ フェドシュークは「ムウルザーエフ Мурзаев」としているが、「ムウラーゾフ Муразов」の間違いと思われる。

フェドシューク「古典作家の難解なところあるいは19世紀ロシアの生活百科」(その10) (鈴木淳一)

が導入された。これは大量消費される商品に対する一種の間接税で、小売値段の中に含まれていて、国庫収入となった。しかし徴税代理人たちは、徴税代理権制度が発足した1763年から100年の間にちゃっかりと、法外な額の財産を貯め込むことができたのであった。

その大部分が商人である資本家階級は、貴族に許されている一連の官位称号や特権を所有することはできなかったが、その埋め合わせとして〈産業顧問官 мануфактур-советник〉(大実業家に与えられた)、〈商業顧問官 коммерции советник〉(実業家に与えられ、8等官、すなわち「省陪席判事 коллежский ассессор」と同等の権利が認められた)、さらにまた〈一代名誉市民 личный почётный гражданин〉に〈世襲名誉市民 потомственный почётный гражданин〉(1832年に導入)といった一種の名誉称号を授与された。最後の二つの称号は商人だけではなく、その他の非貴族、たとえば学者や医者といった人々にも、その特別な功勞に対して授与された。「名誉市民 почётные граждане」には、貴族に匹敵するような一連の特典や特権が与えられた。

チェーホフの短篇『仮面 Маска』には、厚顔無恥で勝手気ままな札付きの悪徳工場主ピャチゴーフが、「世襲名誉市民」として登場する。またゴーリキーの長篇『クリム・サムギンの生涯 Жизнь Клима Самгина』ではドゥニャーシャが、ストラトーフと交わした会話についてこう語っている——「彼が言うには、彼の父親は百姓の倅の草鞋職人でしたが、死ぬときは商業顧問官だったとのこと。彼の父親は自ら手を下して労働者たちを殴りましたが、労働者たちは彼の父親を尊敬していたそうです Родитель, говорит, мой сын крестьянина, лапотник, а умер коммерции советником, он, говорит, своей рукой рабочих бил, а они его уважали。」

貧しい小市民に対しては、貴族はもちろんのこと、商人もまた軽蔑的な態度を取っていた。オストロフスキーの喜劇『身内は後勘定 Свои люди — сочтёмся』ではリーポチカが、手代の夫とぐるになって自分の父親の身ぐるみを剥いでおきながら、こう言って自己正当化しようとする——「しかたないのよ、おとつあん、私たち自身が文無しになるわけにはいかないんだから。どこの

馬の骨とも分からない小市民じゃないんですからね Что ж, тятенька, нельзя же нам самим ни при чем остаться. Ведь мы не мещане какие-нибудь」〔4幕4場〕。

零落し、破産した商人は、小市民階級に転落せざるを得なかった。オストロフスキーの戯曲『深淵 Пучина』には「かつては商人、現在は小市民であるポロフツォーフの息子プット・クウジミーンの破産 О несостоятельности бывшего купца, а ныне мещанина Пуда Кузьмина сына Боровцова」に関する書類が引き合いに出されている〔3幕2場〕⁷。

サルトィコフ＝シCHEDリーンの長篇『僻地の旧習 Пошехонская старина』にはまた次のような一節がある——「祖父の妹は商人に嫁いだが、その商人は後に零落して小市民の身分に移籍されてしまった Сестра дедушки была замужем за купцом, впоследствии пришедшим в упадок и переписавшимся в мещане」〔13章「モスクワの親戚。祖父パーヴェル・ポリースィチ」〕⁸。

⁷ 実際にこうした書類名がそのまま出てくるわけではなく、プットの義理の息子キセーリニコフが書類の内容を読み上げる体裁になっている——「私こと下記の署名者は、かつての商人、現在は小市民であるポロフツォーフの息子プット・クウジミーンの破産を引き起こしたのは、諸々の不幸な出来事、支払不履行、狡猾にして腹黒き債務者たちであることを確信しており… Я, нижеподписавшийся, будучи убежден вполне обстоятельствами дела, что несостоятельность бывшего купца, а ныне мещанина Пуда Кузьмина сына Боровцова, произошла от разных несчастных случаев и от неплатежа и корыстной злонамеренности его должников...」。

⁸ 引用部は正確には次のようになっている——「祖父は自分の出自について思い出すのが嫌いで、後に零落して小市民の身分に移籍されてしまうことになる商人へと嫁いだ実の妹にも決して会わず、手紙のやりとりさえしなかった Он не любил вспоминать о своем происхождении и никогда не видался и даже не переписывался с родной сестрой, которая была замужем за купцом, впоследствии пришедшим в упадок и переписавшимся в мещане」。

2 節

聖職者階級

Духовенство

社会生活の多くの側面——たとえば諸々の公共的制度や学校等々——と直接的な繋がりを持っていた教会は、革命前のロシアでは大きな役割を果たしていた。「至聖にして [最高の権力を有する] 宗務院 Святейший [правительствующий] синод」の首長の座に就いたのは皇帝に指名された高官、すなわち〈宗務總監 обер-прокурор〉であったが、この役職者は宗教界とは無縁の俗界出身者であった。

聖職者階級は今日と同様に〈白い聖職者階級 белое духовенство〉(下級教区僧階級)と〈黒い聖職者階級 чёрное духовенство〉(上級修道僧階級)に分かれていた。「主教 епископ」、「大主教 архиепископ」、「府主教 митрополит」、「総主教 патриарх」といった〈高位聖職者 архиерей〉を目指すためには、剃髪して修道士となり、俗界のすべてを、すなわち家族も財産も、それまでの社会的な縁故関係もすべて捨て去らなければならなかった。こうした聖職者たちが「黒い」と形容されたのは、修道士が黒い衣服を身につけていたからである。チャーホフの短篇『手紙 Письмо』では、司祭のアナスターシー神父が管長のフョードル神父にこう語っている——「知性です！ 素晴らしい知性です！ 結婚なさっていないければ、フョードル神父、あなたはとうの昔に高位聖職者になっておられましたね、きっとそうでしたとも！ Ум! Светлый ум! Не женились бы, отец Фёдор, давно бы в архиереях были, истинно, были бы!». 妻帯者は修道士になることができず、一方また通常の司祭は聖職に就く前に結婚しなければならなかったが、配偶者を失っても再婚することはできなかった。

〈管長 благочинный〉とは、同じ一つ地域に散在する教区全体の活動を監督する司祭のことである。

ロシア文学に登場する回数は、下級教育機関である〈神学教習所 духовное

учищище〉で一定の課程を修了しなければならなかった〈輔祭 дьякон〉や〈長輔祭 протодьякон〉、あるいは〈中等神学校 духовная семинария〉の卒業生である〈司祭 иерей〉や〈長司祭 протоиерей〉といった〈白い聖職者 белое духовенство〉が〈黒い聖職者 чёрное духовенство〉を圧倒している。神学教育機関にはあらゆる階級の出身者が入学でき、農奴の子弟でさえも入学を許可されたが（その際彼らは農奴階級から解放された）、卒業後は聖職に就くことを拒否することもできた。レスコフの長篇『僧院の人々 Соборяне』には、「聖パン焼き女 просвирия」の息子ワルナーワが中等神学校を首席で卒業した後、「詐欺師になるのは嫌だ не хочет быть обманщиком」と言って聖職に就くのを断り、「郡立高等小学校 уездное училище」に数学教師として就職する様子が描かれている [1編5章「長司祭トゥベローゾフの綿布製本」中の「1861年9月29日」の項]。

「中等神学校」を卒業するか、あるいは中退した聖職者の子弟たちは、「雑階級 разночинцы」と呼ばれる19世紀ロシアの[非貴族出身]インテリゲンツィヤの大部分を占めていた。チェルヌィシエフスキーもドブロリューボフも、ポミャロフスキーもグレープ・ウスペンスキーも、さらにその他のロシア文学者や社会活動家の多くが、聖職者の子弟であった。

それぞれの教会の勤務者は、〈教会職員団 причт〉と呼ばれた。「教会職員団」には「主任司祭 настоятель」とそれを輔佐する「輔祭」以外に、神学教育を受けておらず、聖職に叙されていない下級の教会勤務者、すなわち〈堂務者 дьячок〉（正式には〈読経者 псалмщик〉）、それに〈堂守 пономарь〉も入っていた。「堂務者 дьячок」と「輔祭 дьякон」は単語が相似しているのでよく混同されるが、「輔祭」が聖職者階級に属しているのに対し、「堂務者」は1868年以降聖職者階級から除外され、世俗の存在となってしまった。それでも「堂務者」には読み書き能力が必須であった。教会の書籍をしばしば読み上げなければならなかったからである。プシキンの『ペールキン物語 Повести покойного Ивана Петровича Белкина』に登場する架空の作者は、「最初の教育を堂務者から受けた первоначальное образование получил от нашего

フェドシューク『古典作家の難解なところあるいは19世紀ロシアの生活百科』(その10) (鈴木淳一)

дьячка」と告白している [「刊行者より」]⁹。シチエドリーンの『ゴロヴリョーフ家の人々Господа Головлёвы』には、イウドウシカ・ゴロヴリョーフの愛人エフブラクシャは「聖職者階級出身の娘だった была девицей духовного звания」、つまり「堂務者」の娘だったと書かれている [3章「家族の終局」]¹⁰。

司祭の妻は、イウドウシカの姪から女優というのは多種多様な役柄を演じるものだということを知ると、こう指摘している——「ということはつまり、向こうでも同じことで、司祭になる人もいれば、輔祭になる人も、堂務者になる人もいらっしゃるというわけですね Стало быть, и там тоже: кто попом, кто дяконом, а кто и в дячках служит」 [4章「姪」]。

「堂守」は教会の中の最年長者で、その職責は死者のための読経であったが、この読経は辛くて時間のかかる単調な仕事であった。次の有名なファームソフの台詞はここに由来している——

[…曆を持ってきて、]

堂守のようにではなく、心を込めて、
分かり易く、きちんと区切って読むがいい。

[…Достань календарь,]

Читай не так, как пономарь,

А с чувством, с толком, с расстановкой.

[グリボエードフ『智恵の悲しみ』、2幕1場 (ファームソフが召使に命じる言葉)]。

農奴解放後の1860年から1876年にかけて、つまり資本主義的な諸関係の発

⁹ 引用の語順、それに一語が不正確で、正確には次のとおり——「[彼らの息子は] 初等教育を村の堂務者から受けた [Сын их] получил первоначальное образование от деревенского дячка」。

¹⁰ 引用箇所は実際にはこうなっている——「(イウドウシカは) 家政婦としてエフブラクシャという名の聖職者階級出身の娘を雇った (Иудушка) взял к себе в экономки девицу из духовного звания, именем Евпраксию」。

展時期に、階級は法的には維持されてはいたものの、階級間の権利的な差異はほとんど払拭されてしまっていた。徴兵制は（聖職者階級を除いた）全国民に敷延され、体罰は廃止され、形式的には法廷では誰もが平等であり、誰もが等しく納税等々の義務を課されたからである。階級に代わって大きな役割を果たすようになったのは、所得と教養である。小市民階級の前には、公務員となる道も、将校として軍務に就く道も、大きく開かれることになった。

ロシアにおける民主主義と革命運動の発達に大きく貢献したのは、〈**雑階級 разночинцы**（単数 разночинец＝雑階級人）〉である。この言葉の語源となったのは、「種々雑多な官等と称号を持つ人々 люди разных чинов и званий」という法律用語である。彼らは（貴族階級を除いた）多種多様な社会層の出身者で、教育を受けた人々であった。1840年代にすでに彼らはロシア社会生活の最前線に立つようになり、彼らの間から多くの作家や時評家が輩出したのであった。

ロシア文学において初期の「雑階級」を代表する人物像の一人が、トゥルゲーネフの短篇『プニンとバブリン Пунин и Бабурин』に出てくるバブリンである。彼は誠実さと高潔さが売りものの影響力ある人物である。

「輔祭」の息子のグリーシャ・ドブロスクローノフ——この教育を受けた「雑階級人」は、ネクラソフの物語詩『誰にロシアは住みよいか』に登場する中でもっとも輝かしい人物像である [4編「大酒宴」]¹¹。

オガリョーフは『〈多数の中の一人〉への手紙 Письмо «к одному из многих»』の中でこう語っている——「貴族の没落とともに国家の中で一大勢力となろうとしているのは、知的な一大勢力となろうとしているのは、雑階級である С понижением дворянства силою, умственной силою в государстве

¹¹ 4編の「序」には「放蕩人で長老の教父である／教区の輔祭トリーフォンと一緒に／彼の息子で神学生の／サアヴウシカとグリーシャがやってきた… С дьячком приходским Трифоном / Гулякой, кумом старосты, / Пришли его сыны, / Семинаристы: Саввушка / И Гриша;…」とあり、「グリーシャ・ドブロスクローノフ」と苗字まで語られるのは4章「よい時代、よい歌」においてである。

フェドシューク『古典作家の難解なところあるいは19世紀ロシアの生活百科』(その10) (鈴木淳一)

становятся разночинцы」[「鐘 Колокол」189号(1864年9月15日、1553頁)]¹²。

チーホフは1889年1月7日、自らの苦々しい経験を踏まえながら、スウヴォーリンへ次のように書き送っている——「貴族作家がただで自然から頂戴していたものを、雑階級は青春という代価を払って手に入れているのです。Что писатели-дворяне брали у природы даром, то разночинцы покупают ценою молодости。」

最後に取り上げるのは、〈労働者階級 **рабочие** (単数 **рабочий** = 労働者)〉である。労働者の圧倒的多数が法的には農民階級に属していたが、自覚や政治的素養、結束力という面では出身階級をはるかに凌いでいた。興味深いのは、「労働者 **рабочий**」という単語そのものが、一見太古来存在しているかのように見えながら、実はずっと後年になって確立されたものだということである。現在理解されている「労働者 **рабочий**」という意味では、そもそもはほとんどの場合、〈働き手 **работник**〉という単語(そのために女性形が派生することになったのであり、現在でもまだ「女の働き手 **работница**」という単語が使用されている)、あるいは「工員 **фабричный**」、「職人 **мастеровой**」といった単語が使用されていたのである。ドストエフスキーの長篇『罪と罰 Преступление и наказание』では「修理工 **ремонтные рабочие**」のことが「働き手 **работники**」と呼ばれている¹³。

¹² 引用を補足しながらより正確に再現すると次のようである——「ただ一つ、つまり貴族の没落ととも一大勢力となろうとしているのは——国家における知的な一大勢力となろうとしているのは——(雑階級)であり、また発展の土台となるべき一大要素となろうとしているのは土地を所有する農民であるということだけは、どうしても示唆しておかすにはいられない。Только об одном не могу не намекнуть, что с понижением дворянства — силою, умственною силою в государстве, становятся *разночинцы*; а элементом, на основании которого должно совершиться развитие — это поземельный крестьянский элемент」。オガリョーフの書簡は、「鐘」189号(1864年9月15日、1550～1553頁)では『〈多数の中の一人〉への書簡 Письмо к «одному из многих»』と題されており、「鐘」190号(1864年10月15日、1561～1562頁)では『多数の中に一人へ(第2書簡) К одному из многих (Письмо второе)』、「鐘」196号(1865年4月1日、1605～1608頁)では『多数の中の一人へ(第3書簡) К одному из многих (Письмо третье)』と題されている。

¹³ 『罪と罰』2編6章後半にラスコーリニコフが犯行現場を訪ねる場面があり、そこに金貸し老婆の部屋の模様替えをする職人が二人出てくる——「働き手は全部で二人だけだった。

〈付録1〉

パーヴェル・アンドレーエヴィチ・フェドートフ (1815-52)

『少佐の結婚申し込み』(1848)



二人とも若かったが、片方がやや年上で、もう一人は相方よりもずっと年下だった
Всего было двое работников, оба молодые парня, одни постарше, а другой гораздо моложе。